

対面神話を乗り越える —メディアコミュニケーションの 再設計に向けて—

呉羽 真

山口大学 国際総合科学部
講師 / 博士 (文学)

背景と目的

背景: コロナ禍では、オンラインコミュニケーションに対する対面コミュニケーションの優位性を説く言説(「対面神話」)が世間に流布した

目的:

- ① 対面神話の誤りを示した提題者のこれまでの研究を紹介
- ② なぜ人が対面神話を信じるのかを分析
- ③ コロナ禍を契機としたコミュニケーションの再設計を提案

本提題に関連するこれまでの仕事

論文

- 呉羽真 2020. 「テレプレゼンス技術は人間関係を貧困にするか? ——コミュニケーションメディアの技術哲学」
(*Contemporary and Applied Philosophy* 11: 58-76)
- 呉羽真 2021. 「コロナ禍における大学授業のオンライン化は何を示したか? ——コミュニケーションメディアの技術哲学Ⅱ」
(『現象学年報』 37: 107-113)
- 呉羽真 2022. 「オンラインの身体性」
(『認知科学』 29(2): 158-162)

口頭発表

- 呉羽真 「コロナの時代の愛その他の人間関係について —— コミュニケーションメディアの技術哲学」
(アバター共生社会の倫理ワークショップ, 2022/6)

アウトライン

1. 対面神話のどこが誤っているのか
2. なぜ人は誤った対面神話を信じるのか
3. オンラインコミュニケーションをよりよく再設計する

1. 対面神話のどこが 誤っているのか

「対面神話」とは何か

「対面神話」…オンラインコミュニケーションに対する
対面コミュニケーションの優位性を説く言説

- 例) 「オンラインコミュニケーションは身体性に欠けており、対面コミュニケーションに質の面で劣る」
- 注意: 単にオンラインより対面の方が好都合な場合がある/そう思う人がいる、ということではない
 - ▶ それが、技術自体の特性に由来し、誰にでも (or 「標準的」な人一般に) 当てはまるような、原理的な質の差による、とすること
- コロナ禍で世間に流布 (e.g. 貴戸 2020; 川島 2022)
 - ▶ オンライン化による人間関係の貧困化、精神衛生の悪化、社会的能力の低下への懸念
 - ▶ 既存のメディアを巡る議論 (e.g. Dreyfus 2001; Turkle 2015) や、SF作品 (e.g. Forster 1909; Asimov 1957) にも見られる

対面神話の例 —ドレイファス—

ドレイファス (Dreyfus 2001) の主張:

- インターネット (テレプレゼンス技術を含む) は、信頼の源泉である身体性を欠いている
- インターネットが普及した結果、あらゆる社会的相互作用において信頼が疑われるようになる

クラーク (Clark 2003) の応答:

「身体性は不可欠だが、融通が利く」

- オンラインの認知活動は、脱身体性ではなく、変容した身体性を特徴とする
- ↓
- コミュニケーションを含む認知活動において、身体性は重要。だが、問題は何ををもって身体性があると見なすか



インターネットの影響に関する 心理学の知見

「インターネットの逆説」…インターネットが人間関係と社会生活の貧困化をもたらす (?)

- Kraut et al.(1998) の調査 (1995-97年に実施)
 - インターネットを利用し始めると、**家族とのコミュニケーションが減少し、社会的ネットワークが縮小し、孤独感や抑鬱傾向が増す**
 - 「**弱い絆**」仮説: オンラインコミュニケーションによって結ばれる絆は、対面コミュニケーションによるそれよりも弱い
- Kraut et al.(2002) の第2回調査 (1997-98年に実施)
 - 第1回の調査対象者たちの追跡調査では、家族とのコミュニケーション時間、社会的ネットワークの規模、孤独感・抑鬱傾向、のいずれもネット利用と**有意な相関なし**
 - 新規パネル調査では、ネット利用者ほど**社会的ネットワークが拡大**する傾向が見られた
 - ネット利用者数の増大が一因?

インターネットの影響に関する 心理学の知見

「インターネットの逆説」…インターネットが人間関係 と社会生活の貧困化をもたらす (?)

- Kraut et al. (1998) の調査 (1995-97年に実施)

➤ ネットが社会に及ぼす影響を考える上で、ネットを
取り巻く社会のあり方を無視している

➤ 絆は、対面コミュニケーションによるそれよりも弱い

- Kraut et al. (2002) の第2回調査 (1997-98年に実施)

➤ ネットを取り巻く社会状況の変化により、
ネットの利用法およびその影響も変化

➤ ネット利用者数の増大が一因?

ソーシャルメディアの影響に関する 心理学の知見

ソーシャルメディアの影響に関する議論

- 研究初期には、ネガティブな結果がセンセーショナルな仕方
で報道された
 - 例1) Konrath et al. (2011): 共感能力の低下
 - 例2) Twenge (2017): 精神衛生上の問題の増加
- 実際には、ネガティブな影響を否定 or ポジティブな影響を
報告する結果も多数ある (e.g. Carrier et al. 2015; Vossen &
Valkenburg 2016)
- 調査方法の問題も指摘 (cf. Flora 2018; Denworth 2019)
 - 技術の利用法の違いを考慮していない (例: 能動的/受動的)
 - 因果関係を特定できていない (例: スマホ利用と鬱傾向)

教訓

- ① オンラインメディアの悪影響を示す、
確固たる科学的証拠はない
- ② 技術の影響は、社会的要因に依存する

技術 ≠ 物質的人工物 (「もの」)
技術 = 物質的人工物 **in 社会的文脈**

- これらの要因を無視するのが、対面神話の誤り!

フリーモントの病院の事例

- 2019年3月カリフォルニア州フリーモントの病院で、医師が患者に、テレプレゼンス装置越しに余命が短いことを伝え、患者の家族を憤慨させた (Jacobs 2019)



- これは確かに倫理的に問題がありそう。
だが、なぜ問題?



URL=<<https://www.nytimes.com/2019/03/09/science/telemedicine-ethical-issues.html>>

フリーモントの病院の事例の解釈

呉羽 (2020) の主張: コミュニケーションメディアを選択する行為が、「メタメッセージ」(メッセージの受け取り方に関するメッセージ, Bateson 1972) を担うことがある

- メタメッセージの例) 飲食店での店員への「ご馳走様でした」
→「会計しろ」
- メディアの選択が担うメタメッセージの例) 某メダルかじり市長の謝罪文

呉羽 (2020) の解釈: 医師がテレプレゼンス装置越しに余命を宣告したことが不適切なのは、装置を選択する行為が、状況にそぐわないメタメッセージを伝えてしまったから

- 装置の情報伝達性能の限界のためではない

フリーモントの病院の事例の解釈

- 医師には、自分の利害を考慮することなく患者の感情を理解したり、分かち合ったり、和らげようとする態度 (「共感的コミットメント」) の表明が求められていた
- それにもかかわらず、医師は装置を選択したために、手間を惜んでいるというメタメッセージが伝わり、自分の利害を考慮しないという態度の表明に失敗した

市長の謝罪文



呉羽 (2020) の解釈: 医師がテレプレゼンス装置越しに余命を宣告したことが不適切なのは、装置を選択する行為が、状況にそぐわないメタメッセージを伝えてしまったから

- 装置の情報伝達性能の限界のためではない

メディア選択効果のメタメッセージ理論

呉羽 (2020) の理論: オンラインコミュニケーションが不適切になるのは、それを選択する行為が状況にそぐわないメタメッセージを担う場合

- 対面コミュニケーションは、その非効率性ゆえに、自分の利害を考慮しない、という態度の表明に適している
 - ➔ 効率性というテレプレゼンス技術の利点は、それを選択することを不適切にする要因ともなりうる
- ただし、いつもそうではない。メディアの選択が適切かどうかは、様々な社会的要因に左右される
 - 他のコミュニケーション手段の利用可能性、コミュニケーションの目的、話者同士の関係、文化的慣習

おさらい: 技術の影響は、社会的要因に依存する

2. なぜ人は誤った対面神話を信じるのか

なぜ人は対面神話を信じるのか？

主張：対面神話は…

- ・ 誤ったメディア観
- ・ 誤った技術哲学
- ・ 認知バイアス

の産物！

誤ったメディア観としての対面神話

主張：対面神話は…

- ・ 誤ったメディア観
- ・ 誤った技術哲学
- ・ 認知バイアス

メディアを、

他者や世界との直接的相互作用を妨げる「ヴェール」 or
豊かな身体的・非言語的情報をカットする「フィルター」

と捉える

- ・ これらの見方の誤りについては、呉羽 (2022) を参照

誤った技術哲学としての対面神話

主張: 対面神話は…

- 誤ったメディア観
- **誤った技術哲学**
- 認知バイアス

技術は社会のあり方を決定する、という「技術決定論」

- 「ネット/スマホ/テレビ会議システムが人間関係を貧困にする」、という言説は、その一例 (cf. Boyd 2014; Simpson 2017)
- 実際には、技術が社会に及ぼす影響がどんなものになるかは、社会的要因に依存する!

認知バイアスとしての対面神話

メディアを用いたコミュニケーションがうまくいかない場合、問題はメディアそれ自体にあると見なす

- ユーザー側の要因 (利用法や習熟度) を無視
- 認知バイアスの一種?
 - ▶ 例) 「自己奉仕バイアス」: 自分の成功の原因を自分自身の特性、その失敗の原因を状況だと思い込む

• 誤った技術哲学

• **認知バイアス**

の産物!

3. オンラインコミュニケーション をよりよく再設計する

誰が対面を好むのか？ —ソマトダイバーシティ—

オンライン化で助かった人もいる

- **例1)** 聴覚障害をもち、相手の口の動きから情報を得ている人 (赤田 2021)
- **例2)** 他人と目を合わせるのが苦手な人 (呉羽 2021)



呉羽 (2022) の主張: 身体性は多様である、すなわち認知主体に応じて (優劣を比較できない仕方) 異なる

- オンラインに身体性が欠けるという見解は、ある種の身体性を特別視する偏見

誰が対面を好むのか？ —コミュニケーションを形作るもの—

オンラインより対面を好むのは、社会的地位の高い人

- **参考)** リクルートの調査: 会議形態について、管理職では「対面が有意義」、一般社員では「対面でもオンラインでも同じ」が最多 (日本経済新聞 2021)
- **呉羽 (2021) の推測:** テレビ会議に不満を抱くのは、場を支配するための工夫 (座席配置・声音・視線・体勢等) を使えないから?
- **心理学の知見** (馬田他 2022): 対面会議に見られる支配関係がテレビ会議では減少



教訓: コミュニケーションは、多様な慣習や規範、制度によって形作られている

- オンラインコミュニケーションがうまくいかないのは、これらの社会的要因のせいかもしれない

既存のテレビ会議の不便な点

- **脱身体性**
 - 非言語的情報 (表情、身振り、視線、声音、等) のやり取り
 - 触れ合いの可能性
 - 身体的同期
 - 「臨場感」/「雰囲気」/「空気感」(?)
- **偶然の出会いの不在**
 - 例) Zoom会議では偶然出会った人と話し込むことはない
- **体験の共有の困難さ**
 - 例) Zoom飲み会では、同じものを食べるわけではない

既存のテレビ会議の不便な点

・ 脱身体性

- 非言語的情報 (表情、身振り、視線、声音、等) のやり取り
- 触れ合い
- 身体的同調
- 「臨場感」/「雰囲気」/「空気感」(?)

疑問: 一部の人々の身体のあり方を特別視していないか?

・ 偶然の出会いの不在

- 例) Zoom会議では偶然出会った人と話し込むことはない

・ 体験の共有の困難さ

- 例) Zoom飲み会では「同じものを食べるわけではない」

これらは…

- ・ オンラインコミュニケーションそのものの限界?
- ・ 現状のテレビ会議システムの技術的限界?
- ・ 単なるその使い方の問題?

オンラインコミュニケーションの再設計

オンライン化の問題の2つの解決法

① 技術的解決 (cf. 草塩 2020; 篠田他 2020)

- 例1) 操作者の生身の身体運動をより正確に再現するテレプレゼンス技術 (遠隔操作型ロボット等)
- 例2) 触覚まで再現するVR技術

② 社会的解決

- 従来のコミュニケーションを形作ってきた、偏狭な慣習・規範・制度の見直し
- 例) 「人の目を見て話さない」



- ・ より多様なコミュニケーションの可能性が開かれる!

文献①

- Asimov, I. 1957. *The Naked Sun*, Doubleday. (アシモフ, A. 2015. 『はだかの太陽 新訳版』小尾美佐訳, 早川書房.)
- Bateson, G. 1972. *Steps to an Ecology of Mind*, University of Chicago Press. (バイトソン, G. 2000. 『精神の生態学』佐藤良明訳, 新思索社.)
- Boyd, D. 2014. *It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*, Yale University Press. (ボイド, D. 2014. 『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』野中モモ訳, 草思社.)
- Carrier, L.M., Spradlin, A., Bunce, J.P., & Rosen, L.D. 2015. 'Virtual empathy: positive and negative impacts of going online upon empathy in young adults,' *Computers in Human Behavior* 52: 39-48.
- Clark, A. 2003. *Natural-Born Cyborgs: Minds, Technologies, and the Future of Human Intelligence*, Oxford University Press. (クラーク, A. 2015. 『生まれながらのサイボーグ——心・テクノロジー・知能の未来』呉羽真, 久木田水生, 西尾香苗訳, 春秋社.)
- Denworth, L. 2019. 'The kids (who use tech) seem to be all right,' *Scientific American*, January 15, 2019, URL=<<https://www.scientificamerican.com/article/the-kids-who-use-tech-seem-to-be-all-right/>>, 2022/11/29閲覧. (デンワース, L. 2020. 「スマホ利用と心の健康」『日経サイエンス』2020年4月号: 86-92.)
- Dreyfus, H.L. 2001. *On the Internet*, Routledge. (ドレイファス, H.L. 2002. 『インターネットについて——哲学的考察』石原孝二訳, 産業図書.)

文献②

- Flora, C. 2018. 'Are smartphones really destroying the adolescent brain?,' *Scientific American*, February 1, 2018, URL=<<https://www.scientificamerican.com/article/are-smartphones-really-destroying-the-lives-of-teenagers/>>, 2022/11/29閲覧. (フローラ, C. 2018. 「スマホは若者の心に有害か」『日経サイエンス』2018年5月号: 66-73.)
- Forster, E.M. 1909/1997. 'The machine stops,' reprinted in *The Machine Stops, and Other Stories*, pp. 87-118, André Deutsch. (フォースター, E.M. 2022. 「機械は止まる」井上義夫訳, 『E.M.フォースター短篇集』所収, 235~294頁, 筑摩書房.)
- Jacobs, J. 2019. 'Doctor on video screen told a man he was near death, leaving relatives aghast,' *The New York Times*, March 9, 2019. URL=<<https://www.nytimes.com/2019/03/09/science/telemedicine-ethical-issues.html>>, 2022/11/29閲覧.
- Konrath, S., O'Brien, E., & Hsing, C. 2011. 'Changes in dispositional empathy in American college students over time: a meta-analysis,' *Personality and Social Psychology Review* 15: 180-198.
- Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V. & Crawford, A. 2002. 'Internet paradox revisited,' *Journal of Social Issues* 58(1): 49-74.
- Kraut, R.E., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukhopadhyay, T. & Scherlis, W. 1998. 'Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological wellbeing?,' *American Psychologist* 53(9): 1017-1032.
- Simpson, T.W. 2017. 'Telepresence and trust: a speech-act theory of mediated communication,' *Philosophy & Technology* 30(4): 443-459.

文献③

- Turkle, S. 2015. *Reclaiming Conversation: The Power of Talk in a Digital Age*. Penguin Press. (タークル, S. 2017. 『一緒にいてもスマホ——SNSとFTF』日暮雅通訳, 青土社.)
- Twenge, J.M. 2017. 'Has the smartphones destroyed a generation?,' *Atlantic* 320: 58-65.
- Vossen, H.G.N. & Valkenburg, P.M. 2016. 'Do social media foster or curtail adolescents' empathy? A longitudinal study,' *Computers in Human Behavior* 63: 118-124.
- 赤田圭亮 2021. 「コロナ禍の学校から「GIGAスクール構想」を考える」『現代思想』49(4): 25-51.
- 馬田一郎, 伊集院幸輝, 加藤恒夫, 山本誠一 2022. 「対面・オンラインのコミュニケーション特性比較: 共創活動の観点から」『認知科学』29(2): 163-173.
- 川島隆太 2022. 『オンライン脳』アスコム.
- 貴戸理恵 2020. 「オンライン居場所」『東京新聞』2020/5/17, 5.
- 草塩拓郎 2020. 「存在感って? 見えぬ正体「画面越し」に難しさ」『日本経済新聞電子版』2020/9/26. URL=<<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO64270030V20C20A9MY1000/>>, 2022/11/29閲覧.
- 篠田裕之, 稲見昌彦, 藤田政之, 川嶋健嗣, 津村幸治 2020. 「触れずに触り、遠隔で操作する——VRとシステム情報学」東京大学情報理工学系研究科編『オンライン・ファースト——コロナ禍で進展した情報社会を元に戻さないために』所収, 97-130頁, 東京大学出版会.
- 日本経済新聞 2021. 「伝達の会議「オンラインでいい」過半数 リクルート調査」『日本経済新聞電子版』2021/12/2. URL=<<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC0298Z0S1A201C2000000/>>, 2022/11/29閲覧.